

報告タイトル (\* 日本語と英語両方ご記入ください)

朝鮮戦争は国民をいかに再編したのか: 李承晩政権初期の記念日演説にみる理念配置の変容

How Did the Korean War Reconfigure the Nation?: Changing Ideological Configurations in Commemorative Speeches under the Early Rhee Syngman Regime

氏名(所属)

高城 建人(東北大学)

Takashiro Kento (Tohoku University)

要旨(800字程度)

本報告は、李承晩政権初期の記念日演説を分析し、朝鮮戦争が国民言説の構造にいかなる変容をもたらしたのかを検討することを目的とする。第1共和国期の国民形成をめぐっては、憲法制定過程や権力構造、国家保安法を中心とする制度史的研究が蓄積されてきた。しかし、国家が公式の場で国民をいかに語り、その理念構造をどのように再編したのかという問題は、十分に検討されてこなかった。

本報告は、国家が定期的に国民へ向けて発する公式言説である記念日演説に着目する。記念日は祝賀行事であると同時に、国家の正統性を確認し、国民の範囲と規範を提示する言説空間である。本報告では、三・一節、制憲節、光復節、六・二五などの主要記念日の演説を対象に、民族主義・民主主義・反共主義という三理念の関係に注目し、その配置構造の変容を分析する。

分析の結果、朝鮮戦争は新たな理念を生み出したのではなく、既存理念の関係を再編し、その序列を変化させたことが明らかとなる。戦争前には、民族主義が歴史的連続性の基盤として、民主主義が政治的正統性の根拠として提示され、複数理念が並存していた。他方で反共主義は体制防御的な位置づけにとどまっていた。

しかし戦争後には、敵と味方の区別が鮮明化するなかで反共主義が中心原理として前面化し、他の理念を規定する枠組みとして機能するようになる。民主主義や民族主義も反共闘争を正当化する形で再定義された。理念は単なる強調度の変化ではなく、並存構造から反共主義を頂点とする序列構造へと転化したのである。

さらに記念日演説は、犠牲者顕彰や敵の名指しといった儀礼的要素を通じて忠誠の基準を提示し、国民を想像的に再構成する機能を担っていた。こうした象徴的言説は、当時展開された制度的統合とも接続しうる可能性を有していた。本報告は、戦時期の国民形成を、境界の固定化としてではなく、理念構造の再編過程として捉える視角を提示するものである。